

鏡台



十一月二十五日姑の満中隱の法要（四十九日）が済んだ。姑の部屋を占拠していた山ほどの衣類も送ったり差しあげたりして、どうやら片づけることが出来た。

姑の部屋は家の東南にあり、朝日が射し込んで、午前中はポカポカと暖かい明るい部屋である。私はその庭に面した隅に鏡台がほしいと思った。

実は私は結婚して以来、ちゃんとした鏡台を持つことがなかった。新婚の住居は東京中野の六畳一間で、夫の机、実家からの箆笥一棹にリンゴ箱で作った食器棚といった至って簡素なものだった。鏡は裏のニュームの脚を開いて立てる、小型の本ほどのもので、ちゃぶ台の上に乗せて使ったものだった。

舅と一緒に中目黒にいた時、奮発して壁に掛ける短冊型の鏡を買った。ガス台の横がトイレで、ドアの横の柱に掛けた。百七十円だった。ラーメン一杯

四十円の時代である。

無口な舅に

「鏡を買ったのか」

と言われたときは、何か無駄遣いをしたような後ろめたさを感じた。しかしいつでも覗き込めば見ることが出来るということは嬉しかった。長男はまだよちよち歩きだった。私は生まれただけの長女を背負って、鏡に写しては様子を見た。その鏡は、縁のあたりがところどころ剥けてはいるものの、何回もの引越しにもかかわらず割れもせず、今でも茶の間の上に掛かっている。

多摩平の公団住宅のDKは、流し台の横が洗面所で、歯ブラシ入れの扉が鏡だった。家計の足しに始めた塾の生徒が増えて、豊田駅の反対側の古い日野自動車の社宅に移った時は、八王子で神代杉の下に引出しがついたA4版横ほどの鏡を買った。それは結婚の時に母が送ってくれた、櫛のがっしりした箆笥の上に乗せて使った。

転居した当時は、山を削ったばかりの何も無かつ

た豊田駅周辺は、立派な商店街となってきた。四つ角に月賦販売の大手の丸井の店があり、月々の給与では無理な高額のものはそこでよく買ったものだった。ある時そこでライティングデスクの扉が鏡になっているものを見つけた。上に蛍光灯もついている。私はそれを買った。当時としては最新式といえた。ただしそれを鏡台として使うためには扉を閉じねばならない。机として使っていて、筆記用具などを広げているときは不便であった。それでもそれを二十年ほど使ったろうか。

神代杉の小鏡台は、父が霧ヶ峰に昭和寺を建立し、父母がそこに住むようになった時、母に譲った。その頃は五人の子の母になっていて、塾を辞めて、工場でコンピューターのソフトを作っていた。そして早く後家になった鹿兒島の姑にひたすら送金し続けた。そんな忙しい中、まだ使える物を買換えた時は、よく実家に送ったものだった。その小鏡台を母は愛用してくれた。それは母の亡くなった今も実家の仏間にある筈である。

夫が役職を定年となった時は、まさにバブルの真っ最中であった。退職金で払い終わった八王子のマンションに、購入時の二倍以上の値がついた。いずれは夫の郷里に家建て替えねばならない。上の三人の子供はすでに巣立っていた。下の二人の教育費と帰郷までの家賃を計算して、残りで家が建つだけの金額であることを確かめると、私たちは思い切りよくそのマンションを売り払った。引越し先の新宿のマンションは、それまでの半分ほどの面積しかない。古くなって剥けていたライティングデスクは捨ててしまった。

その後は洗面所の鏡と洋服ダンスの鏡で化粧を済ませて来た。鹿兒島に戻ってから通販で卓上用の三面鏡を買った。しかしゆっくり鏡台の前に座ってみたかった。結婚した娘たち二人には腰掛けのついた三面鏡を買ってやっていたが、自分には和式のものがないなと思っていた。

不思議なことに、鹿兒島で家具の広告を見ても、鏡台は殆ど載っていない。ところがまた不思議なこ

とに、私が欲しいと思うとそれは大抵出現して来るのである。

折しも宮之城の夫の友人の家具店の売出しの広告が目に入った。茶の間に小型の整理棚がほしいと思つていたので、夫と見に行くことにした。友人の話では、台風の水害を受けた処を修理し、改装するので在庫を安売りしているとのことであつた。二階に上つて見るとなんと奥に鎌倉彫の和鏡台が一つあるではないか。整理棚もイメージ通りのものがあつて二つとも売出しの値段よりまた負けてもらつて大満足で歸つてきた。

戦前、私は黒いビロードに一杯のフレンチステツチの花の刺しゅうのある鏡台掛けを眺めて育つた。届いた鏡台にどんな鏡台掛けを掛けようかと考えた。娘時代、母が濃いピンク地の繡子に画家に頼んで薔薇を描いてもらつてくれた帯のあることを思い出した。ブリキの衣装箱をガサガサと引き出し、取り出して鏡に当ててみた。しかしそれは多摩平時代に簡単に締められるようにと、胴とお太鼓を切り離して

しまつたので、お太鼓部分では丈が足りなかつた。胴の部分を接ぐのも綺麗にはいかないだろつ。箱の中にもう一本、十七歳のときの御柱祭りに締めていた帯があつた。薄いピンクの紋のある地に、牡丹や菊や桐の花を薬玉のように織り出してあるものだ。名古屋仕立てだが二重太鼓に締められるようにと太鼓部分が十分長い。

このまま箱の中で眠っているよりはと、その帯を切り離した。二つ折りにして鏡台に掛け、赤い地の端切れで紐を四本縫つて、上から十五センチほどの鏡の左右両端で結わえるようにした。帯の幅と鏡の幅が丁度同じで、とても豪華華版である。

今私は、かつての姑の部屋に、花木の多い庭に面して座るようにそれを置き、厚手の更紗模様の座布団の上で、感慨をもって白髪の増えた自分を眺めているところである。

